

ベートーヴェン生誕250年記念前夜 炎のコバケン気魄の指揮・

「ベートーヴェンは凄い」

(1) 全交響曲連続演奏会

大晦日恒例となっている「ベートーヴェンは凄い」全交響曲連続演奏会、2019年は第17回目、この内12回は小林研一郎さんが第一から第九まで一晩で振る！驚異的なプログラム。

九つの交響曲で演奏時間は約6時間、コンサートマスターは素晴らしいリーダーシップが光る篠原史紀さん（NHK交響楽団）も連続出場、毎回感動の新年を上野で迎える至福の年越しです。私は6回体験しましたが、今までにない深い感動が第一番から感じられました。



79歳のコバケンさんはいつも笑顔で謙虚に登場されます。礼儀正しく楽団員に頭を下げられ指揮台に立たれます。指揮棒が振られる、奏者が音をだす、いつもと変わらない動作です。しかし、今年は一寸違う。交響曲第一番の第一楽章から何か違う。難聴の私にもそれが分かる。最も目立つ場にいる第一バイオリンの奏者の真剣さがひしひしと伝わる。

第三楽章あたりからコバケンさんが盛んに顔をハンケチで拭かれる。もしかしたら涙をぬぐっておられるのか？

交響曲第5番「運命」も凄かった。聴衆もいつもと違う反応を示していることが雰囲気分かる。何がちがうのか？

その違いが分かったのは第九が終わってからの挨拶でした。

「今日は鼻血が止まらず、医師が二人付き添ってくれていました」ということ。

いつ倒れるか分からない状況での指揮であったのです。

その体調不良を見せることなく、駆け足で登壇し、幾度もの拍手に応じて笑顔で登壇さんされ感謝の挨拶をされる。微塵も体調不良を感じさせない気魄がありました。

「今日は、団員の皆さんに助けられ、演奏の素晴らしさに何度か涙が出て、指揮をしながら感謝の念で一杯でした」と語られた。素直な方である。

恐らく団員は知らされていたのでしょう。コバケンさんの容体を案じながら、もしかすると指揮者なしの場面も想定しながら、そうならないように、いつも以上に渾身の力を各奏者がふり絞った結果であったと思います。

第九は更に格別でした。2楽章が終わると4人のソリストの入場がありますが、殆ど待ち時間を感じさせないスピードで着席された。4人が万全の準備をして登場を待つて自らの意志で爽やかに登場したことは疑う余地なしでした。

そして圧巻は合唱団員の起立でした。「見苦しくない範囲で大体一斉に立つ」というのが一般的だと思っていましたが、今回は、その一斉が一斉であるとしか言いようのないビデオがあれば記録に残る美しさでした。おそらく

立つ練習をされていたのだと思います。背の高さが違いますから一斉感は表現し難いと考えますが、今回は膝の動きが一致した立ち方でしたので、爽快感が会場に広がったのだと思います。これもコバケンの人柄の現れです。

（ソリストの緩慢な入場、合唱団の不統一な起立はどんな場合でも第九を台無しにしてしまいます。これを指摘している評論はあるのだろうか）

こうなると相乗効果が益々働きソリストも抜群でした。合唱に負けない高音域が要求されるソプラノ、よく響いてしました。メゾソプラノの支えも抜群で、フィナーレ

はもう今までにない最高潮。ここまで全ての人が指揮者に、これほどまでに全身全霊を捧げた第九はなかったのではないかと私は思いました。

聴衆もそれに応えて深夜にもかかわらず興奮の坩堝に浸っていました。

今年はベートーヴェン生誕250年記念、世界をあげて祝典が各地で計画されています。

私は昨年から2年間のベートーヴェン講座を平野 昭先生のもとで学んでいます。楽譜が読めない者にも親切に人間ベートーヴェンを語って、時代背景と作品の関連、小さな作品の解説、めったに聴くことの出来ない作品を聴かせて頂いてベートーヴェンの精神性の広さと深さを学習しています。

ベートーヴェンの人生脚本は「苦悩を突き抜け歓喜に至る」だと私は考えています。ベートーヴェンを暗いから嫌いという識者（自分は教養が高いと思っている人々、エリート意識の高い人）が少なくありませんが、優しいピアノソナタが沢山あります。底の深いところから湧き出てくる希望の響きもあります。

オリンピックの後にベートーヴェンを一曲聴いてみましょう。

私が敬仰するベートーヴェン第九の研究家藤井義正さんの現況をお知らせします。氏の研究は深耕しています。頂いたお手紙から紹介します。

(2) 藤井義正さんの2020年1月15日の書簡冒頭

私は12年前「私の〈第九〉」という拙稿を自費出版いたしました。「第九」に関する私の見方の概要は其中で言い尽くされているのですが、今回改めて、なぜ「〈第九〉我が心の杖」の執筆を思いだったかと言うと、そこにはそれなりの思いがございます。

私は長年ラジオの電波を使って行う高齢者対象の生涯学習の現場にいました。平均寿命がぐんぐん伸びて長い長い高齢期を生きて行かなければならぬ人々の心に励みとなるような生涯学習情報の提供に心血を注いできました。



そして、今や人生100年時代とも言われます。それは一面幸せなことかもしれませんが、厳しい老いの道を歩む者にとっては、厳しい試練の連続とも言える時代です。私自身80代の半ばに突入しています。そういう高齢期を「明るく楽しく日々肯定的に生きる」にはやはり心の杖が必要です

そして私自身、長年私の人生航路の中でベートーベンの第九はずっと「心の杖」になってくれていました。そういう「我が心の杖」に改めて向き合ってみたいと思ったのです。

そしてそれは、私自身の為だけではなく人生100年代を迎え長くて厳しい人生航路を歩んでいる現代の高齢者のためにも必要だと思ったのです。これはしかし表向きの動機です。腹の底にはもっと根強い使命感にも似た動機がありました

(3) 藤井義正著「私の〈第九〉」p154からの引用（初版2008年8月1日）
私の第九には「連帯」だとか「人間愛」だとか「自由」だとか「民主」だとかそういう政治の世界に登場してくるスローガンはない。

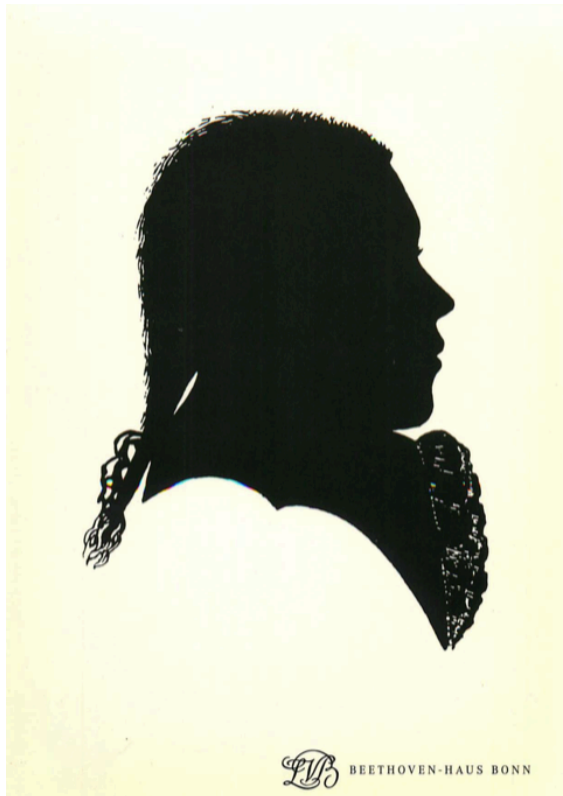
あるのは「厳しい人生危機に直面して苦しむ人たち」「老いを迎え、自らの尊厳の崩落に怯える人たち」「厳しい競争社会の中で人間としての理性を失いかげ苦悩をしている人たち」「矛盾と欺瞞に満ちた現代社会の中で、自分らしい真実を守るため苦闘する人たち」の悩みや不安である。

「私の〈第九〉」はそういう苦悩、そういう不安、そういう気持ちに寄り添ってくれる第九である。私自身はこれが本来の第九だと思っている。こういう「私の〈第九〉」と「人類は皆兄弟、抱きあえ」をベースとする「世界の第九」との間では相当の開きがある。だからといって私はそういう世界の第九を否定するつもりはない。

(4)私（ベストピアの筆者）の「第九」

私もベートーヴェンには興味をもってボンやウィーンに何度か足跡を訪ねたりして、素人ながら熱心にそれなりの探検をしていました。「第九」についてベストピア誌上に最初に書いたのが平成21年12月号でした。その時既に藤井義正さんの本は出版（平成20年8月）されていたのですが、たどり着けず他の参考文献を読んできました。どれを読んでも第九の翻訳に納得できず、その不自然な訳の多さに混乱していました。そこで、沢山の訳から自分の納得できる訳を捻出しようとして音楽を聴きながら大胆で勝手な訳を始めました。

すると次の年に偶然に藤井さんの本に邂逅しました。これには愕然としたと同時に、同じように邦訳に疑問を持ち研究されていることが分かり安堵しました。方法



論迄は同じでしたが、語学力の優れた藤井さんには脱帽して、自宅を訪ねて教えを乞いました。その後は親しくご指導を頂き、平成23年12月、平成26年12月と「私の第九第4楽章の解釈」をバージョンアップしてきました。まだ、未完です。少しでも納得のいく解釈がしたいと興味を抱き、現在ベートーヴェン研究第一人者平野 昭先生の講義を2年間続けることにして今年の12月16日ベートーヴェン生誕250年を心に刻みたいと思っています。

藤井さんの研究は更に進化をと続けられており執筆活動が続いています。

中間の原稿も拝読させて頂いております。その内容の精緻さに驚くばかりで

す。完成の暁には大々的にご紹介したいと思います。藤井さんの第九の研究は、机上のものでなく、上記引用のように厳しい老いの道を歩む者に勇気を与える「晩晴塾」も主催され多くの参加者から喜ばれました。今は「我が心の杖第九」に専念されておられ「晩晴塾」は休講中です。再開を楽しみにしている一人です。

「ベートーヴェンは想像もつかないほどの混乱を乗り越えて、その道程で得たすべての洞察をこの曲に託しました。体がボロボロの不健康な状態で、その上完全に失聴したまま、最後の力で我々聞き手に幸せへの道を、人類への贈り物として残そうとしました」マンフレッド・クラメス（ドイツ人のホリスティック医学者の言葉）

パリ通信

昨年12月5日から始まった「年金改正法反対」ストライキは40日を過ぎた今も続いている。

パリの交通機関が機能せず、行動半径が制限され、予定は押され、物事がなかなか先に進まない。1月中旬になり、政府は年金受給資格年齢を64歳に引き上げることを保留し、交通機関はようやく正常に戻りつつある。